原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第三十三号

遺族・溝口さんのその後

許されようか栗木幹

二人の息子を殺された恨みは深い

よみがえりくるジャングル生活

払えぬ不安

大牟田市甘木の、国道二百八号線から西の方に折れる細道で、舗装するための前工事が行われている。鳥取建設工業（大牟田市手鎌。鳥取孝幸社長）が請け負っている〝炭鉱離職者対策事業〟の一つ。働いているのは、三人の女性を含めた二十七人のグループの労働者たちである。

一面や肌が赤銅いろに陽焼けしているこの人びとは、ひと目で高令者とわかる。事実、大半が三池炭鉱の停年退職者で、三池遺族会会長の溝口生松さんはそのなかの一人である。

溝口さんがこの仕事に就いたのは昭和三十六年（三池闘争収拾の翌年）だから、今年で十四年めということになる。明治三十五年の三月五日生まれなので、溝口さんは五十八歳のときから、「天皇陛下より一つ少い」（溝口さん談）七十二歳という高令の今日まで、この仕事を働きつづけてきたわけだ。

溝口さんの顔は、もともと彫が深い。そのうえ赤銅いろに陽焼けしているし、またひたいや目尻あたりには太いシワが刻まれているから、性来の一徹さがありあり。

いま、溝口さんの賃金は、一日三千四百三十円也。それにこの仕事には、休日補償が一日千百円ずつ加算されるので、総稼ぎはといえば月に九万円ほどになる。もっとも、手取りはかなり減るが。

妻の名は春子さん。六十歳ちょうど。失対事業で働いている。でも袋はりという軽作業のこと、その賃金は安く一日千三百円（月に一万数千円）にしかならぬ。

とまれ、夫婦打ちそろって全日自労大牟田分会のれきとした組合員で、溝口さんはいう。

「おかげで、暮らしの方は何とかやっていけます」

が、大牟田市船津町二七二ー九にある住まいに、乳児のころ不幸にも悪性の脚気をわずらい、そのため体の自由をうしなってしまった長女洋子さん（三十八歳）がいることを思えば、先ざきの不安はかくしようがないはずだ。

悔恨は深い

溝口さんは、遺族のなかでもとくに、あの大爆発のとき泉さん（長男。享年二十六歳）と勇男さん（次男。同二十三歳）という二人の息子の命を、いっぺんにもっていかれてしまった大悲劇を背負わされた人として、だれ知らぬ者もいまい。

「あれたちが元気でいてくれさえすれば、七十二のこのとしになるまでも苦労せずにすんだでしょうが、三井から殺されたばかりにとんだ苦労を背負わされてしまいました」——とは溝口さんの嘆きである。また、その通りだ。

実は溝口さんは、例の太平洋戦争のときまで、フイリッピンに住んでいたのだった。ミンダナオ島のダバオで、麻を栽培する自営農民だったのである。

溝口さんには、そのころすでに五人の子どもがいた。その五人の子どもの命を、敗戦前後のあの恐怖のなかでかろうじて守り抜き、二十年の秋やっと母国にひき揚げることができたのだった。ところが、自分たちの将来を託していた長男と次男を、大爆発でいっぺんにうしなったのだからこたえた。

「ちょうど、三井の鬼どもに殺してもらうために、息子たちをつれ帰ったようなもんですたい」

溝口さんの悔恨は深い。

異国の地で

溝口さんの脳裏に、いまも鮮やかによみ返ってくる恐ろしい敗戦前後の思い出。

日本帝国主義の対米開戦直後、一度はフイリッピンから追われた米軍は、日本軍のガダルカナル撤退、山本元師の戦死、アッツ島での玉砕を契機にいよいよ攻勢に転じ、十九年十月には早くもフイリッピン諸島へ逆上陸を開始。

わが国の空は、連日来襲するB29の機影で覆われ、二十年の四月になると、米軍はついに、溝口さん一家が住むミンダナオ島上陸。直ちに進撃。日本軍は、次つぎに敗走していった。

そのころ同島には、民間人ばかりで二万人以上の日本人がいたが、「邦人は山に避難せよ」との軍命により、とるものもとりあえず、マッキンレー山脈のジャングルのなかへ逃げこんだ。

そこへ、敗走してくる日本兵約四万人がかけこんできたから、マッキンレーのジャングルは、何と六万人以上の日本人でふくれあがったのだった。

そのとき、溝口さんの子どもたちは、九歳だった長女洋子さんをかしらに、長男泉さん八歳、次女美代子さん六歳、次長勇男さん五歳、それに三女美智子さんが四歳というように、いずれも幼児に過ぎなかった。とくに、九歳になっていたとはいえ、長女の洋子さんは母親の春子さんにおんぶされなければならない不自由な体の子だったから、一家の苦労はどんなだったろう。

としにも負けず、重労働でがんばる遺族—溝口さん
（向つて左側に立つている人）

逃亡生活

とにかく、今後いつまでつづくかはかり知れないジャングル生活にそなえるために、一家は最低必要とする食糧を携行しなければならなかった。溝口さんは幾らかの米、塩、塩漬けした豚肉などを車に積み、これまで飼ってきた牛にそれを曳かせながら、ジャングルを奥へ奥へとわけいっていった。

直径が三メートルから六メートルもあるラワンやラッカクなどの巨木が頭上を覆い、真昼でさえ太陽の光を通さず暗かったジャングル。そこには、ニシキヘビがおりイノシシがおり、猛猿がおり、でっかい山トカゲがいた。そこを当てもなくたどる一家は、それこそ生きた気持はなかった。

米軍がくりだす飛行機は、非情にも連日、ジャングルのなかに逃げこんだ日本人を求めてはジュータン爆撃を加え、チラリとでも動こうものなら、すかさずそこへ機銃弾が降りそそいできた。

そのうえ艦砲射撃も重なっていたから、昨日まで緑に覆われていた大森林が、今日は真っ赤に焼けただれた地肌をさらけだすというふうだった。

溝口さんの一家は、ひたすら奥へ奥へと逃げていった。

二、三日すると、車どころか牛さえ曳いてはいけない、けわしさのなかえ踏みこんだ。その日以度は、もと隠れ住んだ場所から新しい隠れ家まで、携行した食糧を、溝口さん自からが肩にかついで運ぶほかなかった。そのため、一日に何回も何回も往復した。それも、日本兵からさえ察知されないように、心を配らなければならなかった。ひとかけらの食糧もたずさえず逃げこんだため、飢えに飢えていた彼らから、いつどこで襲われるかもわからなかったから。

現に、いきなり日本刀や拳銃をつきつけられ、それらの日本兵からかけがえのない食糧をもっていかれた日本人が決して少くなかったのである。

もう「ヤマトダマシイ」も「天皇陛下」もなかった。自分が生きるためには、他人のことなど考える余裕はなかった。

そんな日本人のうえに、くる日もくる日も弾丸の雨は降りそそいだ。爆撃の跡にちぎれ飛び、累るいと投げだされた日本兵や民間人の死体。血に染まりながらも、死にきれずにのたうちまわる軍馬。

あるときなど、次の隠れ場を求め、いま逃げだしてきたばかりの隠れ場に向け、不意に爆弾の雨が集中し降っていくのを見ては、溝口さん一家は、とたんに身も心もすくんでしまい、その場にへたへたと座りこんでしまったものだ。

不気味の空

溝口さん一家は、ほとんど毎日カユをすすって露命をつないだ。炊事は、米軍にさとられぬようにこっそり、夜陰に行った。

一家がマッキンレーのジャングルに逃げこんでから、百二十日ばかりもたったろうか。ある日、米軍の砲爆撃がパタリとやんだ。急に静まりかえった空の不気味さに、一家はいっそうおののくのだった。ジャングルの奥にかくれていては、天皇が国民に向かい、ラジオを通じて告げた敗戦のことなど、知るよしもなかったから。

溝口さん一家が、海浜を当てもなくほうこうしているところを米軍の手で収容されたのは、それから数日後のことだった。

不思議にも命永らえ、溝口さん一家は二十年十一月母国へ。その翌年の四月にはもう、溝口さんは一家のノリを得るために三池炭鉱に入社。機械工として、三川鉱の坑内へ。四十五歳のときだった。

溝口さんは、三十二年三月停年退職。それと前後し、鉱山学校（三井経営）から横すべりに、父親の跡を継ぐように三川鉱に入社。ともに坑内仕繰工として働くようになった、泉さんと勇男さんの兄弟だったのである。その二人の命を、まさかいっぺんに三井資本の手で奪われようとは。

兄の泉さんには、そのときすでに、富美子さんという妻に、一粒だねの泰子ちゃん（いま十二歳で小学五年生）もいたことが悲しみをそのうえ大きくしたのだったが、溝口さん夫婦にすればまぎれもなく、三井に殺してもらうためにばかり、あれほど惨たんたる苦労を積み重ねながら、彼らをつれ帰ったようなことにしかならぬのである。

法廷で叫ぶ

溝口さんは、三池大災害裁判の法廷で、遺族を代表し陳述した際さけんだ。

「私たちは、会社幹部を殺人罪で告訴しましたが、検察庁は『原因不明』『証拠不十分』で不起訴にしました。あれほどの大量殺人を犯しながら、幹部のだれ一人罪にならず、ことに最高責任者の栗木幹元社長は、去る四十六年の文化の日、ゆうゆうと勲二等旭日章という勲章さえ受けています。犠牲者の私たちがこれほどの苦しみにあえいでいるのに、こんなことが許されてよいでしょうか。

会社は、その後も九十二人もの労働者の命を、坑底で虫ケラのように奪っていますが、ちょうどなま木をひき裂かれたような遺族のその後の苦しみは、たとえようがありません。無理がたたって病気になり、すでに亡くなった遺族が六人もいます。私も七十一歳です。（昨年十一月現在）

どうか、なくなった父や夫や息子たちに勝訴の報告ができますように、裁判長の英知と決断で審理がすすめられることをのぞんでやみません」

溝口さんならずとも、なんで労働者の大量虐殺を行った栗木幹を許すことができよう。

「ちょうど、三井の鬼どもに殺してもらうためにばかりつれ帰ったようなもの」といい、また二人の息子の命をいっぺんに奪いとられ、そのためいまもって、老いの身にムチを加えながら働かなければならない溝口生松さん。その胸に、どうして三井独占資本に対する怒りの焔の燃え立たないはずがあろう。

闘いの先頭に立つとき、溝口さんのまなざしは鋭い。